様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月　１９日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：21720192
研究課題名（和文）日本語教育を必要とする児童生徒の成長・発達における日本語習得の意味に関する研究
研究課題名（英文）Study on the meanings of Japanese language acquisition for the human development of children who require Japanese language support

研究代表者
尾関　史（OZEKI FUMI）
早稲田大学・日本語教育研究センター・講師
研究者番号：00505399

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語教育を必要とする児童生徒の成長・発達において日本語学習がどのような意味を持っているのかを明らかにすることを目的としたものである。幼少期に複数言語環境で成長した若者およびその親に対し国内外でインタビューを行い、彼らの日本語学習過程や学習環境の把握、またそれらの成長・発達における意味について考察した。調査研究の成果の一部は口頭発表および論文の形で公表しており、今後も引き続き分析・考察を進めていく予定である。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to clarify the meanings of Japanese language acquisition for children who require Japanese language support. Through interviewing Japanese learners who grew up among plural languages in their childhood, and their parents, how Japanese language learning affects the learner's human developments is studied. Interviews were held in Japan, Thailand and Korea. The outcomes from this research have been presented at an academic conference and in the following paper. This study will be continued to develop a deep understanding of the meanings of children's language acquisition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２１年度	800,000	240,000	1,040,000
２２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：年少者日本語教育
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：年少者日本語教育、継承語教育、帰国子女教育、外国人児童生徒、国際結婚子弟、帰国生、複数言語

１．研究開始当初の背景

国境を越えた人や物、情報の移動が日常的になるにつれ、国や文化の間を移動しながら成長・発達を続ける子どもたちが国内外で増加している。外国人児童生徒、帰国児童生徒、国際結婚家庭の子どもなどがその一例である。そして、年少者日本語教育、帰国子女教育、継承語教育といった各領域で子どもたちに対する言語教育支援のあり方が模索されてきた。しかし一方で、子どもたちの背景はもはや「日本人」「外国人」という枠組みで捉えきれないほどに多様化しており、国語教育、日本語教育といった従来の枠組みの中だけで子どもたちの言語教育を支えていくことには限界も見られ始めている。

このような中、申請者は国や文化の間を移動しながら成長・発達する子どもたちの問題を「移動する子どもたちの問題」として包括的に捉え、言語教育支援のあり方を模索してきた。しかし、申請者の研究を含め、このような子どもたちに対する研究の大半は、幼い子どもたちを対象としているため、ことばを学ぶことが自分にとってどのような意味を持つのか、また、そこでの学びがその後の成長や発達にどう影響しているのかを子ども自身が言語化したり、意識化することは難しい。

そこで本研究では、学齢期に母国以外の国で暮らした経験があり（もしくは現在も暮らしている）、現在、既に成人している若者にインタビューを行い、子どもの成長・発達過程における言語学習および言語習得の意味を探っていきたいと考えた。また、海外の言語教育機関を訪れ、授業見学および現地の教育関係者との意見交流を行い、子どもたちの言語学習環境および、そこで学ぶ子どもたちの実態の把握を行いたいと考えた。そして、これらの調査から得られたデータをもとに、複数言語環境で育つ子どもたちに対する言語教育のあり方を具体的に提案していくことを目的とした。

２．研究の目的

本研究では、学齢期に母国以外の国で暮らしながら日本語を習得した経験のある若者へのインタビューを通し、以下の３点について明らかにすることを目的とした。

(1) 日本語（あるいは外国語）を学ぶことは、子どもの人としての成長・発達にとってどのような意味をもっているのか
(2) 日本語（あるいは外国語）を学ぶことが、子どものアイデンティティ形成にどう寄与しているのか
(3) (1), (2)の考察を踏まえ、子どもたちに育てていくべきことばの力とはどのようなものか

以上３点の考察を踏まえ、子どもたちの成長・発達を支える言語教育支援のあり方を提案していきたいと考えた。

３．研究の方法

以下、それぞれの年度ごとに調査研究方法の概要をまとめる。

(1) 平成 21 年度

平成 21 年度には、主に国内でのインタビュー調査を中心に進めた。具体的な調査研究の概要は次の４点である。

①インタビュー調査に向けた準備

先行研究に目を通し、インタビュー方法への習熟、インタビュー内容の検討を行った。また、インタビュー対象者の選定やスケジュール調整などを行った。

さらに、これまで筆者が行ってきた日本語教育実践の成果（授業記録、音声データなど）について再整理を行った。なおそのうち、本研究課題と関連するものに関しては、改めて考察を行い、本研究活動の一部として分析、考察を進めていくこととした。

②インタビュー調査（国内・海外）実施

日本に暮らす「外国人児童生徒として育ってきた若者」および「帰国生として育ってきた若者」2名にそれぞれ2回のインタビューを行った。また、海外（タイ）に暮らす「複数言語環境で育ってきた若者」2名にもインタビューを行った。さらに、海外（タイ）の継承語教室において授業見学および関係者との意見交流を行った。

③調査結果の分析・考察

それぞれのインタビューデータを文字化し、分析・考察を行った。

④国内外の学会・研究会での研究成果の発表

一連の分析･考察で得られた知見を研究会および学会で公表（口頭発表）した。

(2)平成 22 年度

続く、平成 22 年度には、前年度のインタビュー調査の継続に加え、海外でのインタビュー調査を実施した。また、研究成果を国内外で発表したほか、研究成果の一部を学術論文として公表した。具体的な調査研究の概要は次の３点である。

①インタビュー調査（国内・海外）の実施

昨年度に引き続き、国際結婚や両親の仕事などの理由により、幼少期に複数の言語文化環境で成長してきた若者およびその親に対し、インタビュー調査を行った。本年度は国内外の計12名の若者および親にインタビューを実施した。

これらのインタビューに加え、子どもたちの言語学習環境を知るため、海外（タイ・韓国）において補習授業校や継承語教室等の見学、関係者との意見交流を行った。

②調査結果の分析・考察

昨年度および今年度のインタビューで得られたデータを文字化し、分析・考察を行った。なお、一部のデータは現在も分析を継続中である。

③国内外の学会・研究会での研究成果の発表、研究成果の学会誌への投稿

インタビューの分析から得られた知見をまとめ、国内外の学会で公表した。また、一連の研究で得られた知見の一部を学術論文としてまとめ、学会誌に投稿した。なお、このほか、現在、査読中の論文も複数存在する。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

国内外におけるインタビュー調査および海外教育機関の訪問を通して、子どもたちの言語学習過程および言語学習環境の把握を行った。これらの調査研究のデータの分析・考察から得られた知見の概要は以下のようにまとめられる。なお、それぞれの知見については、口頭発表および論文の形で広く公表した（現在、継続中のものもあり）。

・日本語の学びが他者との関係構築の過程と深く関わっていることがわかった。具体的には、他者との関係性の中で日本語学習の動機が生まれ、自身の日本語能力が評価され、日本語学習の意味が実感されていることが明らかになった。（雑誌論文①）

・他者との関係の中で、自分の思いや考えを伝え、相手に思いが通じたという「実感」を伴う日本語使用の経験を重ねていくことが、彼らの自信につながり、その後の人間形成にも大きな影響を与えていることが明らかになった。(学会発表②，③)
・一連の研究成果を踏まえ、他者との関係性の中で自身の日本語学習の意味を捉えなおしていけるような日本語教育実践の設計を試みた。(学会発表①)

(2)得られた成果の国内外における位置づけおよびインパクト

本調査研究で得られた知見の意義は、以下のようにまとめられる。

・子どもたちの言語習得や言語学習を当事者である子どもたちに自身の語りから探り、子ども自身にとっての言語学習の意味を明らかにすることにより、言語教育のあり方を考えていこうとしている点。このような子ども自身の視点から言語教育を捉えなおすというアプローチは、これまでの調査研究には見られないものである。
・これまで年少者日本語教育、海外子女教育、継承語教育、国語教育など、それぞれの分野で別々に考えられてきた言語教育の問題を「日本語教育を必要とする子どもたち」の問題として包括的に捉えなおし、調査研究をおこなった点。また、国内にとどまらず、海外に暮らす子どもたちも対象とし、インタビュー調査や言語教育環境の把握を行った点。

以上の理由から、今回の調査研究で得られた知見は、国内だけでなく海外で日本語を学ぶ子どもたちにとっても示唆を与えうるものであると考える。また、日本語教育の領域にとどまらず、関連領域にとっても意義のある知見になっていると考える。

(3)今後の展望

今後の展望として、以下のような展開を考えている。

①調査研究データの分析・考察の継続

今回の調査研究で得られたデータを引き続き分析・考察していく。なお、分析・考察から得られた知見は、今後も口頭発表、論文などの形で公表していく予定である。

②具体的な教育実践の検討

今回の調査研究で得られた知見および示唆をもとに、具体的な言語教育実践をデザインし、実施していく。これらの実践から得られた知見についても、適宜、口頭発表、論文などで公表していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①尾関史(2011)「日本語を学ぶ子どもは自らの日本語学習をどう捉えているのか―子ども自身の語りから探る日本語学習―」『小出記念日本語教育研究会論文集』19号,pp.57-72.査読あり

〔学会発表〕（計３件）

①尾関史(2011)「日本語教育実践において自己を見つめることの意味―「自分史を書く」クラスの実践から―」国際研究集会「言語教育とアイデンティティ形成―ことばの学びの連携と再編」(2011.3.6 於：早稲田大学)
②尾関史・深澤伸子・牛窪隆太(2010)「もう一つの「日本語教育」―日本国外で成長する子どもたちにとっての日本語学習の意味―」タイ国日本語教育研究会第 22 回年次

セミナー（2010.3.23 於：タイ・泰日経済技術振興協会附属語学学校）

③牛窪隆太・尾関史・深澤伸子・渡貫善華(2009)「教室の中と外を結ぶ日本語教育―ある帰国生の学びの軌跡から―」第 7 回ことばと文化の教育を考える会（2009.12.18 於：早稲田大学）

６．研究組織

(1)研究代表者

尾関　史（OZEKI　FUMI）

早稲田大学・日本語教育研究センター・講師

研究者番号：00505399